炎症部位に集積したものと考えられた．本症例のように腫瘍細胞と炎症と混在する症例において ^{111}In 標識白血球シンチグラフィを施行する際には，この両者のいずれに集積したかを鑑別することは重要であり，この際に経時的な撮像が有用である可能性が示唆された．

9. ^{67}Ga シンチグラフィが経過観察に有用であった中胚葉性混合腫瘍の1例

尾崎 裕 雨宮 謙 白形 彰宏
玉本 文彦 住 幸治 片山 仁
(順天堂大浦安病院・放)

中胚葉性混合腫瘍は閉経後婦人の子宮体部に好発する稀な疾患であり，その特徴的画像所見は未だ不明である．今回，手術・剖検にて確認されている原発巣・肺およびリンパ節転移巣・局所再発巣を，ともに良く ^{67}Ga シンチにより描出し得た1例を経験したので報告した．

一般に ^{67}Ga シンチは泌尿生殖器系腫瘍ではその有用性は劣るとされているが，本症例で集積が良好であった理由として，その組織学的性質や腫瘍径の大きさが関与していたと推察された．

10. 興味ある核医学検査所見を呈した非ホジキンリンパ腫心転移の一例

河原 俊司 小須田 茂 石橋 章彦
田村 宏平 篠原 央 (国立大蔵病院・放)
飯尾 宏 (同・外)
向井美和子 (同・病理)

悪性リンパ腫の心臓への転移は剖検では約10～30%に認められるが臨床症状を現わすことが少なく，生前に確認される例はきわめて稀とされている．今回われわれは非ホジキンリンパ腫の心臓転移によって上大静脈症候群を起こした症例に心 RI アンギオグラフィを施行し右房内に欠損像を認め，病巣に一致して ^{67}Ga および ^{201}Tl の集積を認めた興味ある一例を経験した．核医学的検査が診断，治療上きわめて有用であったと思われたので，若干の文献的考察を加えて報告した．

11. ミューラー管嚢胞の MRI 所見について

須山 一穂 藤野 淡人 呉 幹純
池田 滋 石橋 晃 (北里大・泌)
田所 克己 菅 信一 (同・放)

今回ミューラー管嚢胞の診断において MRI が有用であった症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する．

症例は，前立腺炎をくり返している男性で逆行性尿道膀胱造影，IVP，CT，精管精嚢造影では，診断に至るまでの所見を得られず，経直腸的超音波検査では，膀胱後壁に Cyst Lesion を認めた．MRI の T_1 強調画像の矢状断および前額断でミューラー管嚢胞に特徴的な部位に低信号の腫瘤性病変を認め T_2 強調画像は，同部に高信号の腫瘤性病変を認めた．以上よりミューラー管嚢胞を疑い経会陰式嚢胞穿刺術，嚢胞造影を行った．内容物に精子を認めず最終的にミューラー管嚢胞と診断した．MRI は膀胱壁，前立腺，精嚢を明瞭に描出でき特徴的嚢胞の存在部位を明らかに示すことができた．また，内容物の化学的性状についてもある程度推定可能と思われ，経直腸的超音波検査より有利な点も認められた．

12. 移植腎の腎シンチグラフィ——症例呈示——

小泉 潔 内山 暁 荒木 力
日原 敏彦 尾形 均 門澤 秀一
可知 謙治 松迫 正樹 (山梨医大・放)
田辺 信明 山田 豊 上野 精
(同・泌)

昭和58年の山梨医大開院以来，施行された腎移植は29例である(生体腎27例，死体腎2例)．そのうち術後合併症として以下のものが見られた．慢性拒絶反応3例，急性拒絶反応2例，急性尿細管壊死2例，腎動脈血栓症，腎静脈血栓症，腎梗塞，リンパ嚢腫各1例である．いずれも腎シンチグラフィ上ほぼ典型的な所見を呈したので症例供覧する．腎シンチグラフィの方法は Tc-99m DTPA 静注後 RI angio，および1分ごとの連続イメージを撮った．データ解析として，GFR，Perfusion Index を算出し，I-131 ヒップランによるイメージングを行った例は ERPF も算出した．慢性拒絶反応は徐々に進行する血流低下所見を呈した．急性拒絶反応は急激な血流低下をきたした．急性尿細管壊死は血流はある程度保た

Presented by Medical*Online